

## 〔 病 ・ 虫 害 発 生 概 況 〕

## 〔 病 害 〕

昭和44年度の病害の発生状況は、水稻ではいもち病、白葉枯病、紋枯病、ウイルス病いずれも発生は少であったが、福岡県の一部地区で白葉枯病による急性萎凋症の発生が九州ではじめて認められた。野菜類ではウイルス病の発生が漸増し、特にスイカにキュウリ・緑斑モザイク・ウイルスによるコンニャク病が一部で発生し問題となった。また、ハウス栽培トマト、露地栽培キュウリにウイルス病の多発生がみられた。その他の病害は全般的に平年にくらべて少または並発生であった。

## 稲 病 害

葉いもち病は、早期水稻では例年にくらべて初発は早かったが6月中旬までは停滞気味であった。しかし6月下旬～7月中旬までの梅雨による長雨のため、長崎の五島、壱岐、熊本の中山間、山麓地帯、大分の一部、宮崎の霧島台地、鹿児島の大隅、薩摩半島の一部で発生がみられた。普通期水稻では長崎の県北部、五島、壱岐、大分の中山間部や平坦部の過肥田で7月上旬～中旬に発生が目立ったが、梅雨明けにより病勢は停滞した。なお、長崎では田植機による稚苗移植栽培に発生が多く認められた。全般的に発病苗の本田持ち込みが少なく、7月後半からの高温、多照、少雨のため葉いもち病の発生は少であった。穂いもち病は、早期水稻では宮崎の霧島台地、鹿児島の一部でやや多発したが、普通期水稻では葉いもち病の発生が軽微であったことと出穂期以降の好天のため発生が少なかった。白葉枯病は、常発地の発病は例年より早く7月中旬頃に認められ、8月中旬の台風9号によって漸増したが、その後は台風の来襲もなく高温、多照、少雨のため病勢の進展がみられなかった。福岡の粕屋郡、朝倉郡では九州ではじめての白葉枯病の急性萎凋症状（Kresak）が認められた。紋枯病は8月、9月が小雨による乾

燥のため発生は少であった。ごま葉枯病は8月中旬以降に大分の秋落田、湿田、沿海部の砂質田、宮崎の一部でやや多発生した。籾枯細菌病は佐賀、長崎、熊本で普通期水稻の出穂期頃の高温のため早生の品種金南風、サチミドリ、コガネニシキ、ニシカゼおよび中生のクマサリ、ホウヨク、シラヌイ、トヨタマなどの品種に発生が多かった。小粒菌核病は、普通期水稻で大分の沿海平坦部、宮崎の霧島西部および沿海中部に多発した。萎縮病、縞葉枯病、黄萎病は発生が少なかったが、萎縮病は大分の県北部、県中部の沿海平坦部、宮崎の沿海中部、鹿児島島の混作地帯で発生が多かった。また熊本では、最近多くなった散播直播栽培に萎縮病の発生がかなり認められた。心枯線虫病は大分の一部に幼穂形成期から出穂期にかけて発生し、白枯れ症状を呈した。網斑病は大分で7月中旬より急激に増加し、特に北部沿海地帯では下葉の枯れ上がりが目立ち、出穂後に止葉葉鞘にもかなり発生がみられた。

## 麦 類 病 害

麦さび病は、冬期間高温、多雨であったため麦が徒長し感受性が高まり例年にくらべて全般的に初発生は早かったが、その後の進展が少なく発生は平年並またはそれ以下であった。長崎では裸麦小さび病が3月中旬に各地で発生し、五島、橘湾沿岸、島原半島で激発した。赤さび病は大分で5月上旬発生し、5月中旬以降に県中北部を中心に急激にまん延しジュンレイコムギ、ヒヨクコムギは枯れ熟れ症状を呈した。黄さび病は、福岡の宗像地区で小麦に5月9日、裸麦に5月30日に小発生がみられ、いずれもおそい発生であった。黄さび病はそれ以外の地区では認められなかった。うどんこ病は発生が例年より早く、麦が徒長気味のため小麦では長崎の島原半島、西彼杵、橘湾沿岸地帯、宮崎の一部、鹿児島島の薩摩半島で多発生したが、全般的には少発生であった。赤かび病は麦の出穂、開花期が多照、少雨のため発生がおそく少発生であった。ウイルス病の大麦縞萎

縮病は、宮崎の常発地である山間高冷地帯では初発生がややおくれ、4月上旬であったがその後やや増加した。しかし全般的に少発生であった。

### その他の病害

なたね菌核病は暖冬のため発生が早く、鹿児島では2月上旬より一部に発生が認められ、3月中旬葉に病斑を認めたが茎への進展がなく発生少であった。熊本でも好天に恵まれ並の発生であった。馬鈴薯疫病は、長崎では春作に5月上旬から発生し収穫期まで進展し多発となった。熊本では発生時期はおくれたが入梅とともに進展し全般にまん延した。馬鈴薯葉捲病は長崎の島原半島で秋作の一部に多発した。甘藷黒斑病は長崎の五島で収穫時のいもに発病が多く認められた。野菜類では、ハウス栽培のトマトに疫病、灰色かび病が全般的に発生し、ウイルス病ではタバコ・モザイク・ウイルス（トマト系）の発生が目立ち、熊本、宮崎では全株発病した圃場が局部的にみられた。ウリ類の病害では、熊本、宮崎のハウス栽培キュウリに立枯性疫病が多発し、宮崎では台風によって冠水した地帯のハウスに発生が多かった。熊本、宮崎の露地栽培キュウリにカボチャ・モザイク・ウイルスとキュウリ・モザイク・ウイルスの混合感染によるウイルス病が多発した。また、半促成ハウス栽培スイカに熊本、宮崎の一部でキュウリ・緑斑モザイク・ウイルス（スイカ系）によるコンニャク病が発生した。レタス菌核病は、熊本で9月中旬播種したレタスに12月中旬より発生し収穫終りの3月下旬まで続いた。果樹ではカンキツのそうか病、かいよう病、黒点病が6月後半から7月前半までの連続降雨により全般的に発生が多かった。

### 〔 虫 害 〕

昭和44年度特異的に大発生したのものとしてまづ、セジロウンカ、トビイロウンカがあげられる。昭和41年以降、42年、44年と殆んど連続して大発生がみられている。その主要因としては6月下旬から7月中旬にかけての異常飛来があげられるが、この異常飛来は全国一斉調査や南方洋上、東支那海上での調査と総合すると、関東、北陸以西の全国的規模のものであることが解かった。セジロウンカでは飛来直後の吸汁、産卵痕による被害が多く、波状の飛来とその間の降雨により、薬剤防除に困難を来した地帯も

多かった。その後は8月に入っても発生は殆んどみなかった。トビイロウンカでは、その後7月末から8月中旬にかけての第3回成虫期を経て、8月下旬の第3世代幼虫期にすでに早期田では坪枯れを見た地帯もあり、9月に入って第4世代幼虫期には、坪枯れによる被害はますます広がった。防除時期方法の不適もあり、被害が進行した地帯が多く、稲出穂後のパイプダスターなどによる粉剤散布に対する反省が多かった。防除不適による圃場では、条坪枯れ、（熊本）様相を示す場合が多かった。

ニカメイチュウでは例年並の発生であったが、やはり第1回成虫の発生が多峰型で、その後発蛾による被害を充分抑えることが出来ない場合が見られた（佐賀）。

イネネットムシは全国的にも多発生であったが、九州でも各地で早植水稻で多発生が見られ（福岡、佐賀）たが、9月以降発生は少なかった。

アワヨトウムも各地で多発生し（福岡、佐賀、長崎、鹿児島）、とくに長崎の離島では牧野に集中加害が見られた。これは5月上、中旬の第1回成虫の産卵に起因するものと考えられ、成虫の発生量、時期を予察する方法の開発が要望された。このほか新開の牧野におけるヨトウムシ類の集中発生が見られ、その発生機構、予察の研究の必要性が強調された。

鹿児島、宮崎ではカメムシ類による加害が増加の傾向にあり、米の品質向上が求められている現在、重要問題になりつゝある。早期、中期稲ではミナミアオカメムシ、クモヘリカメムシ、普通稲ではクモヘリカメムシ、ホソヘリカメムシが主体であり、後の場合には、中山間、山麓地帯の発生が多かった。出穂後穂に集り、稔実低下、異臭をのこし、品質規格低下が甚だしい。

熊本県、熊飽、菊地、上益城台地の畑作地帯においてゴガネムシ類の異常発生がみられ、麦、タバコ、ラッカセイ、大豆、カンショ、山林など広範囲に被害を及ぼした。このため予察法、防除法について特別に調査を始めている。防除法としては、殺線虫剤の多面的利用が考えられている。

イネのウイルス病は近年漸減の傾向にあるが、トビウンカ縮葉枯病でとくに目立っているが、マグロヨコバイ萎縮病の場合には、局部的にやゝ多発した場合も見られた。（福岡）

（九州農試環境第一部）